

「幸福度指標」に見る人口減少社会の未来の扉
～小国町「住民アンケート」から～

2020年5月

公益財団法人 地方経済総合研究所

「幸福度指標」に見る人口減少社会の未来の扉

～小国町「住民アンケート」から～

<趣旨>

地域企業の経営は、これまでに無い大きな節目を迎えている。

自然災害、地球環境、世界的感染症、高齢化・人口減少社会、高度情報化社会などの急展開である。

これらの不可逆的環境変化に対して、事業を継続し、発展させるには、従来の経済合理性の追求強化に加えて、‘何か’が、必要である。

その‘何か’は、これまで積み重ねて来た経験や勘からは、見えてこない。

当研究所は、経済・社会・環境問題を一体とし、‘誰一人取り残さない’という包摂的理念を掲げ、2015年に国連で採択された^{エスディージーズ}SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）と、2011年からOECD（経済協力開発機構）が提唱している「幸福の枠組み」から、その‘何か’を探り出そうと挑戦している。

最初の挑戦である、2020年1月に実施した小国町との共同調査・研究「住民アンケート」幸福度調査において、その手がかりをつかむことができた。

<本レポートの構成>

第1章：1970年に、総務省から‘過疎地域’の指定を受けた人口約7,000人の小国町。人口減少に歯止めがかからない寂しさを感じながらも、そこに生活する方々の幸福度の高さと、その内容を紹介する。

第2章：町内6つの集落の幸福度を、比較する。

最も幸福度の高い「西里」は、2009年に小学校が廃校になった人口400人の、第三者から見れば、‘限界集落’。

第3章：その背景を、住民アンケートから整理し、潜在する新しい世界を開示する。

経済合理性の追求では、この事実は見えてこない。‘過疎地域’‘限界集落’が、人口減少社会の未来の扉を開く世界である。

そこに、新たなビジネスの可能性（コロンブスの卵）を見出した。

※本レポートは、2020年3月にOECD東京センターに提出した報告書の要約版です。

報告書本文にご関心のある方は、当研究所にご連絡ください。贈呈いたします。

「住民アンケート」幸福度調査について

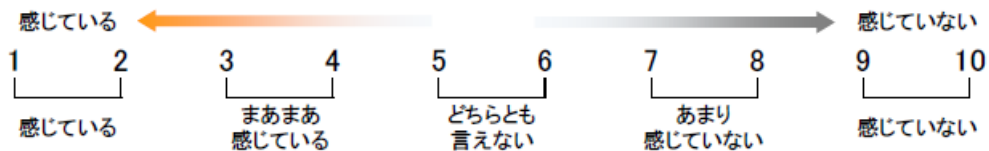
- ・本調査は、小国町の第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定等に活かす目的として行った小国町と当研究所との共同調査・研究である。
- ・質問票設計にあたっては、「OECD 幸福の枠組み（10項目）」に対し、熊本県独自の指標である「県民総幸福量（AKH）※1」の考え方を参考にした。
- ・分析手法及び仮説設定等について、九州大学 主幹教授 都市研究センター長 馬奈木 俊介 先生にご指導と監修を頂いた。

※1 県民総幸福量（AKH）～県民アンケート（「県民の幸福に関する意識調査」）に基づき算出された県民幸福量を測る総合指標（AKH：Aggregate Kumamoto Happiness）

質問票（一部抜粋）

1. 収入や資産（預貯金やローン、不動産の保有など）について

あなたのお宅では、現在、ご家族を含めて、生活に必要な収入や資産を得ていると、感じていますか？

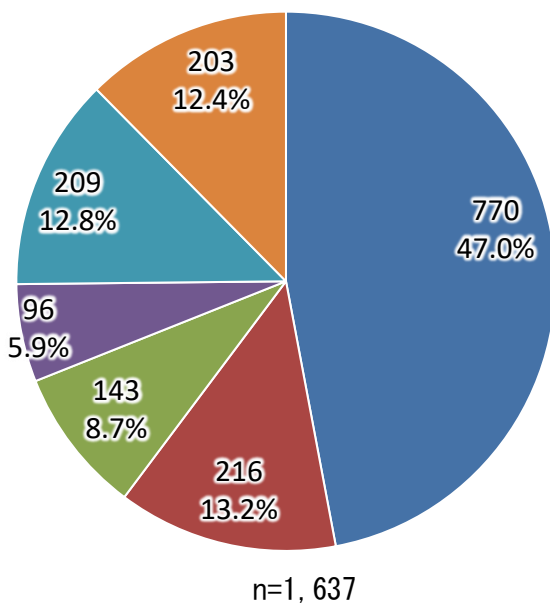


調査概要

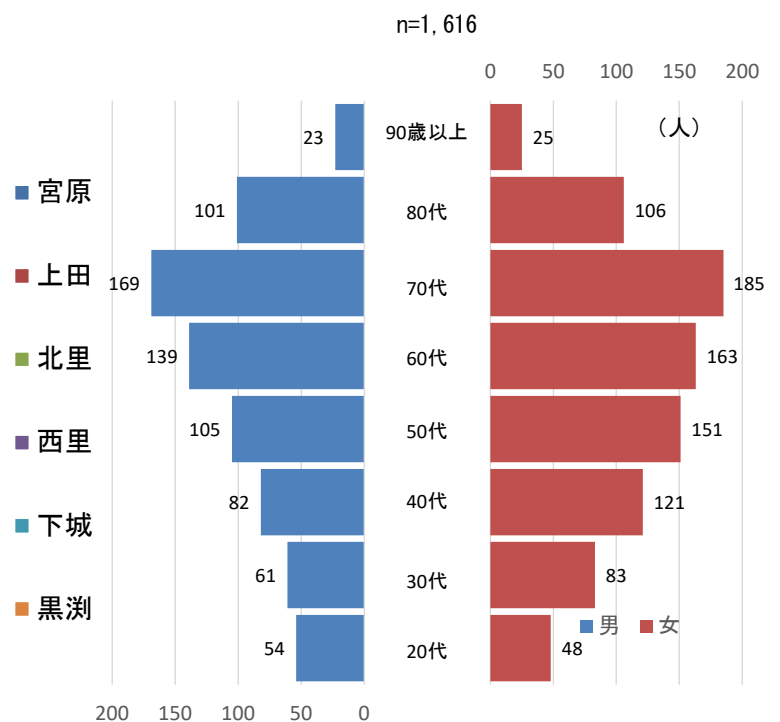
➤調査対象 町内 20歳以上人口 6,067 人の内、4,000 名を対象に郵送調査。
（小国町住民基本台帳：2019年12月1日時点）

➤有効回答数 1,664 先（回答率 41.6%） ➤調査期間 2020年1月14日～1月31日

図表1：居住地区



図表2：性別・年代別



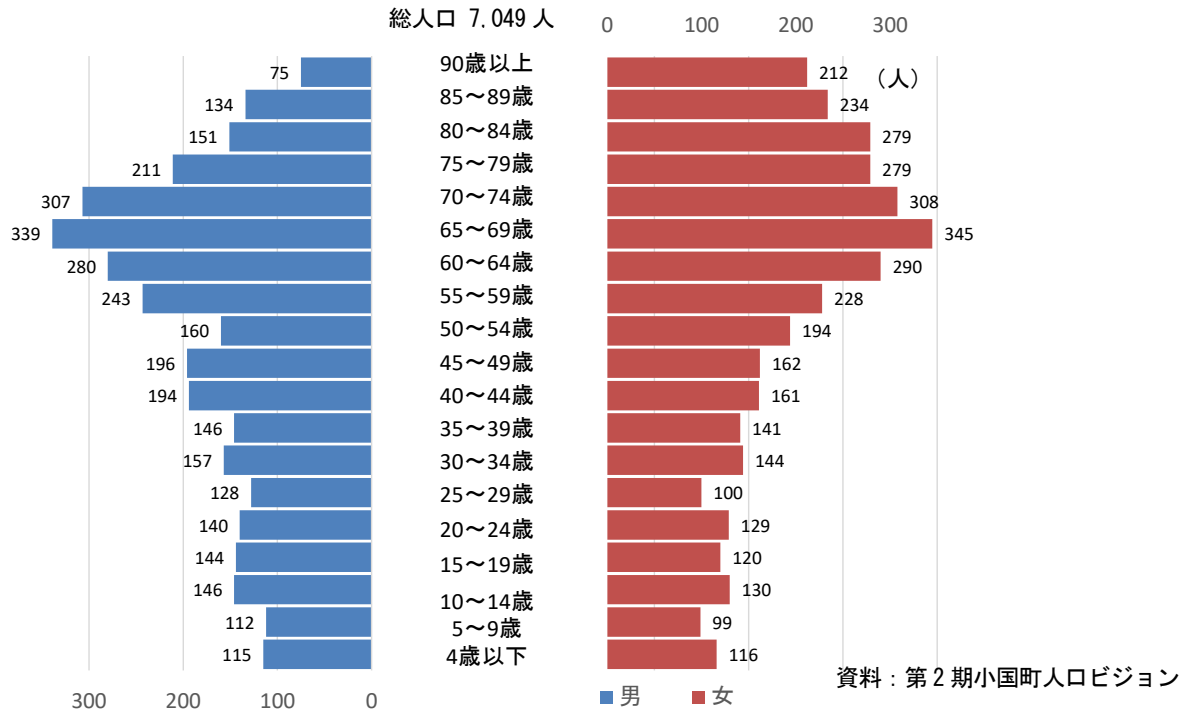
第 1 章

➤1970 年に、総務省から‘過疎地域’の指定を受けた人口約 7,000 人の小国町。
第 1 章では人口減少に歯止めがかからない寂しさを感じながらも、そこに生活する
方々の幸福度の高さと、その内容を紹介する。

1. 過疎地域の新規在住者

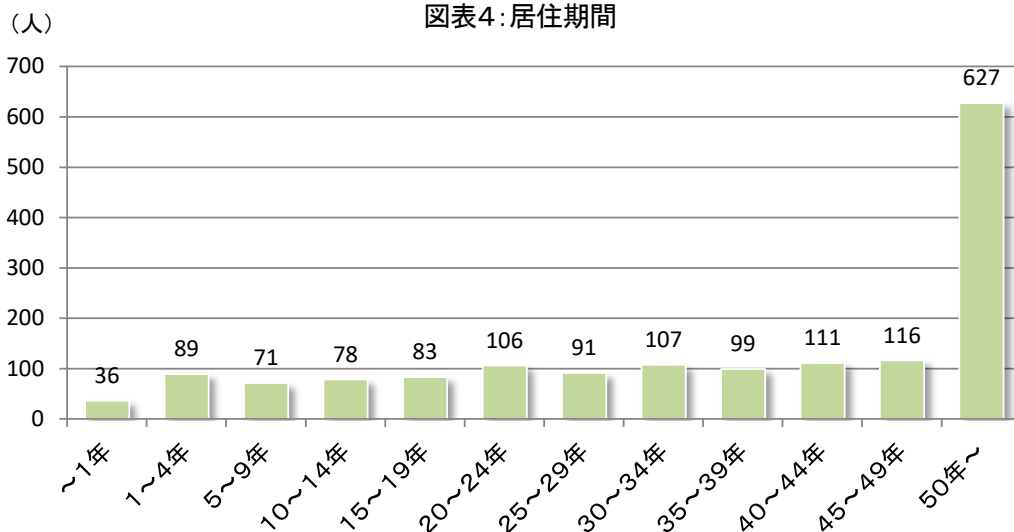
>小国町の総人口は、7,049人（第2期小国町人口ビジョン～小国町住民台帳2019年12月～）。
 人口ピラミッドは逆三角形に近づき、総務省から‘過疎地域’に指定されている。
 >それでは、人口減少一辺倒かという点、今回の住民アンケートから見えてきた事実は、少し違う。
 毎年、約100人の一定かつ安定した‘新規在住者’が居る。

図表3:小国町の人口ピラミッド



・小国町の人口ピラミッドは65～69才を最大値に持つ少子高齢化の典型的な構造を持つ。

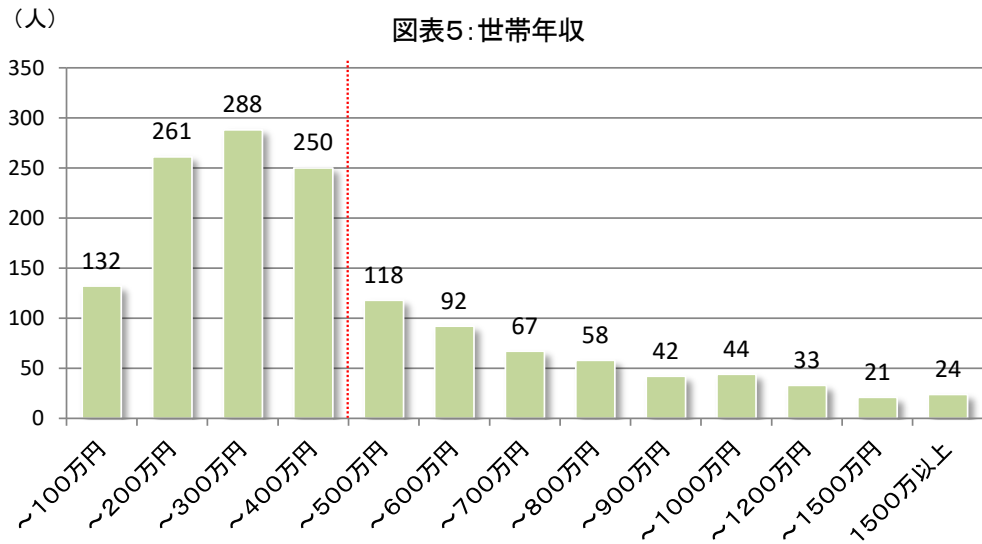
図表4:居住期間



・アンケートの回答数は、人口のほぼ1/4であるので居住期間0～4年を4倍すれば、500人。1年では100人となり、新規在住者は年間100人となる。

2. 世帯年収に対する満足度

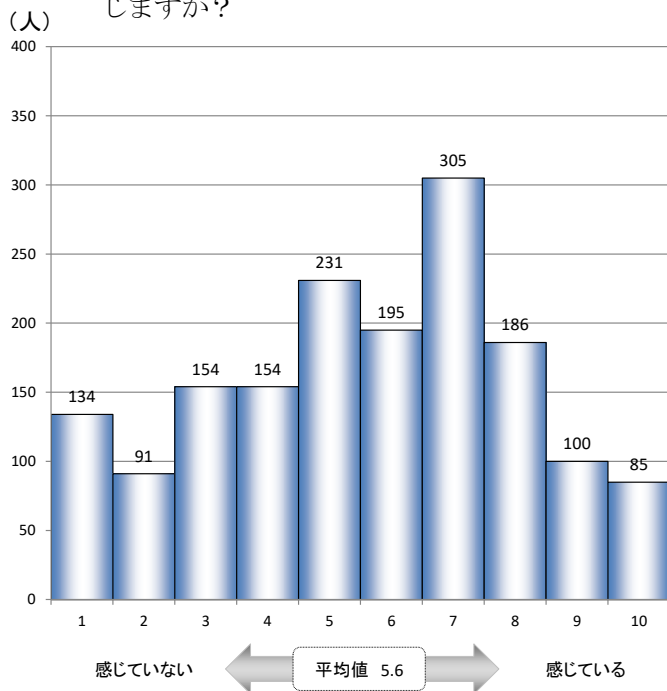
>世帯年収 400 万円以下が、全体の半分以上を占める。
 >それに対し、‘現在の収入’ や、‘仕事のやりがい’ に対する満足度は、高い。



・アンケート回答者のうち、世帯年収が 400 万以下の割合は、65.1%となる。

図表6: 現在の収入に対する満足度

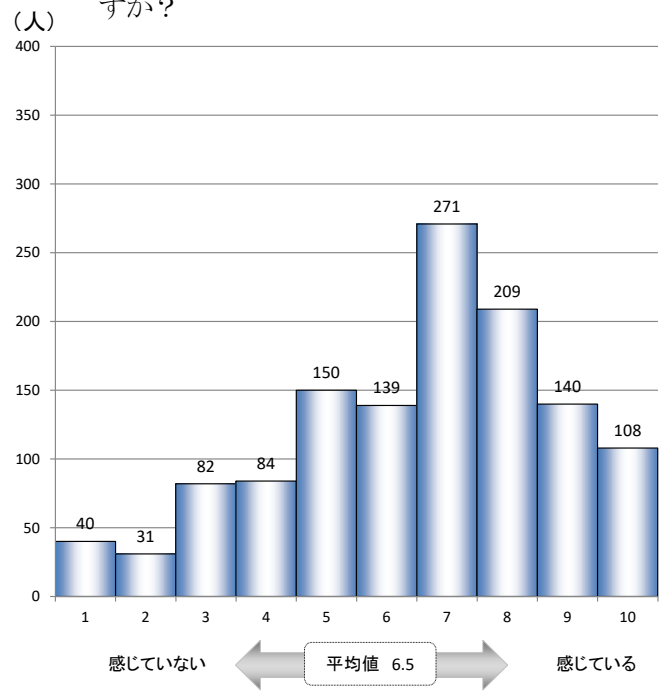
Q. あなたは生活に必要な収入や資産を得ていると感じますか？



・「平均値 5.6」は、10 段階評価の丁度中心。

図表7: 仕事のやりがい

Q. あなたは現在の仕事に「やりがい」を感じていますか？

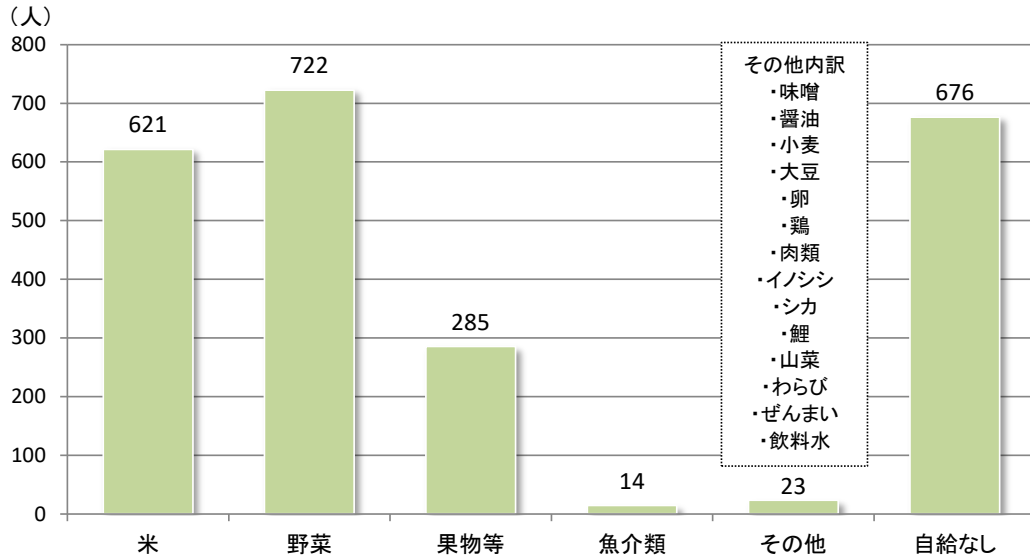


・仕事の「やりがい」に対する評価は、極めて高い。

3. 食料自給の状況と住まいの満足

> 自らの耕作に加え、自生する食料にも恵まれている。
 > 住まいに対する満足度も、高い。

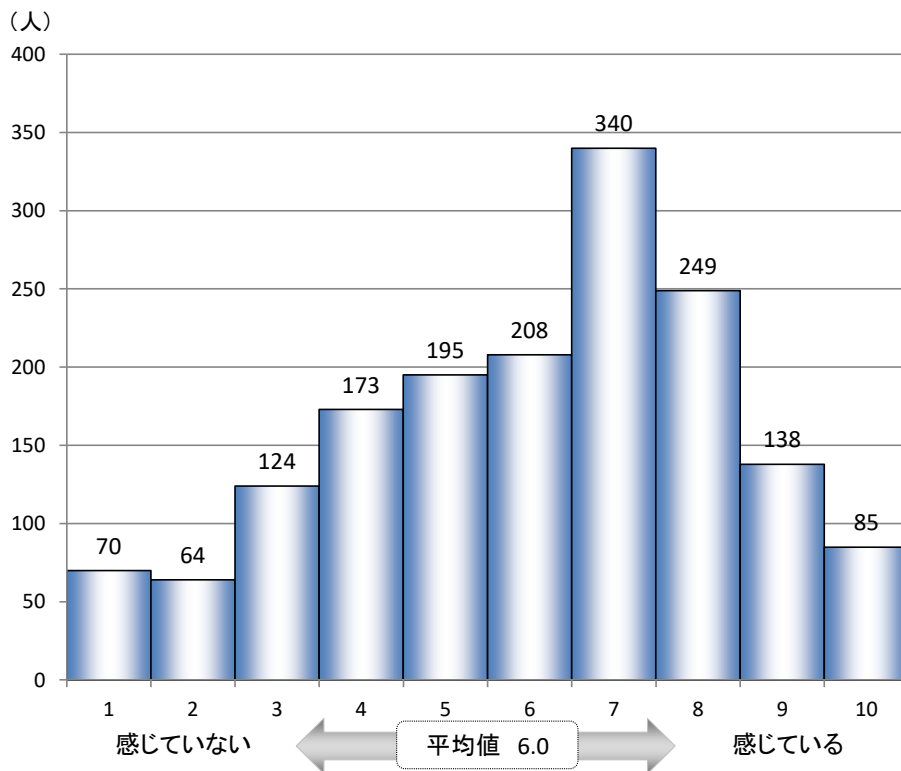
図表8: 食料の自給



・豊かな自然を背景として、幅広い農作物が自給されており、恵みを楽しんでいる。

図表9: 住まいの快適さ

Q. あなたは、現在のお住まいに「快適さ」や「ゆとり」を感じていますか？



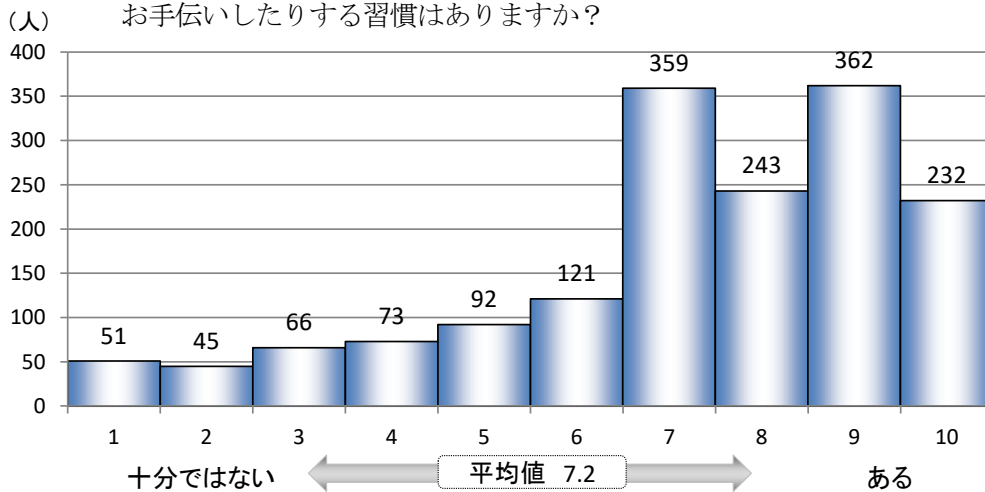
・住まいへの「快適さ」や「ゆとり」に対する評価は高い。

4. 地域の相互サポートと地元への愛情

➤ 生活の豊かさはGDPだけでは測れず、幸福の根本は、地域との関係性の中で、「信頼」にあることに気づかされる。

図表10: 相互扶助と互惠

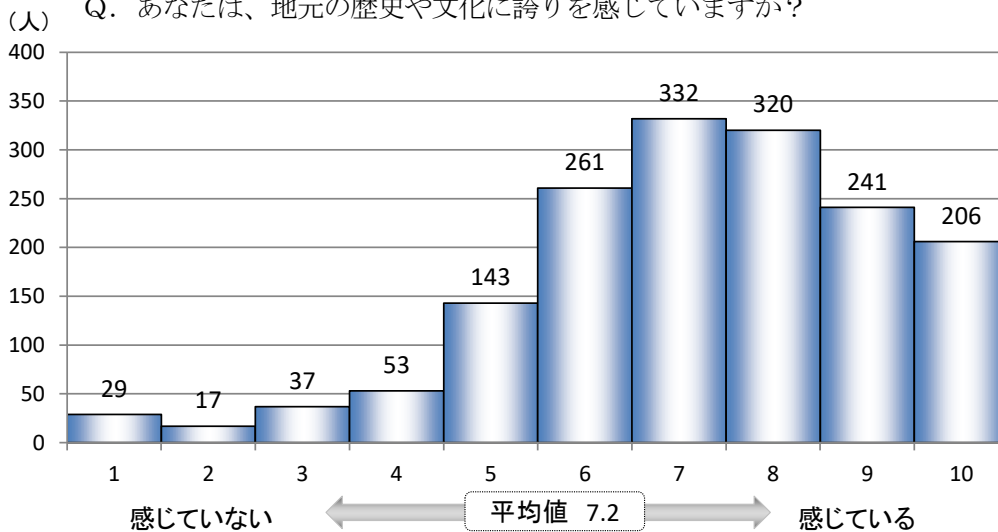
Q. あなたのご近所、あるいは地域では、何かあった時にお互いに声を掛け合ったり、お手伝いしたりする習慣はありますか？



・地域での結び付きが強く信頼を得ている。

図表11: 地元の歴史と文化

Q. あなたは、地元の歴史や文化に誇りを感じていますか？



・地元への愛着が強く、住み慣れた地区が築き上げたものが求心力を持っている。

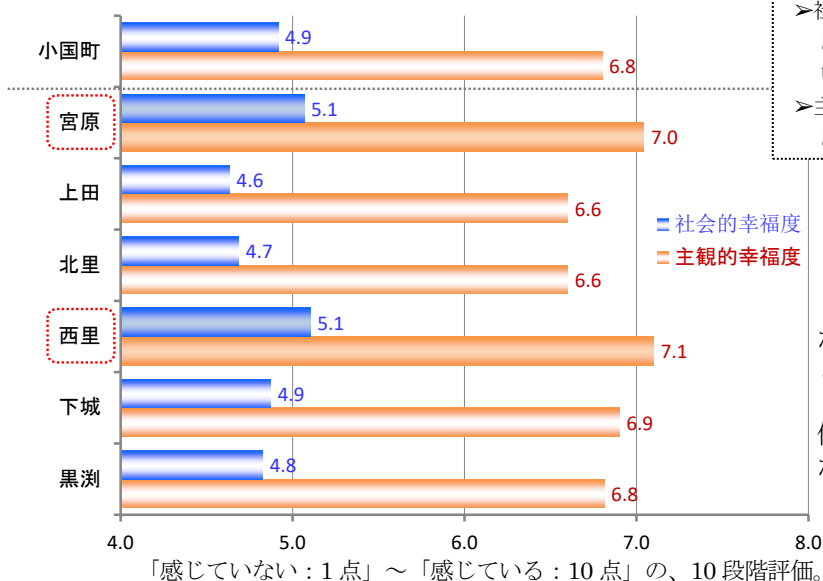
<第1章のまとめ>

➤ ‘人口減少社会’ ‘過疎地域’ ‘限界集落’ の言葉には、ネガティブなイメージがある。
 ➤ そこからは、「将来、無くなる地域に税金を使うのは無駄だ。」という考え方が生まれ、説得力のある合理性を感じる。
 ➤ しかし、まずは価値判断を入れない、ニュートラルな事実認識が重要ではないか？
 次章以降、この点を掘り下げる。
 ☞ ‘過疎地域’ に潜在する、全く新しい市場の創造にまで、つなげていく。

第 2 章

➤ 第 2 章では町内 6 つの集落の幸福度を、比較する。
最も幸福度の高い「西里」は、2009 年に小学校が廃校になった人口 400 人の、
第三者から見れば、‘限界集落’。

図表 1：小国町の「地区別」幸福度



➤ 社会的幸福度

あなたは、あなたの地域がより良い方向に向かっていると感じていますか？

➤ 主観的幸福度

あなたは、現在、「幸せだ」と感じていますか？

幸福度の数値について

幸福度の数値は、低いより高い方が良いが、〇〇点以上が良いと、それ未満は悪い、というものではない。

今回の小国町の初めての調査を基盤に、他地域との比較が進むことで各地の特徴が明らかになることが期待される。後段の図表 4～9 の満足度も同様。

※小国町の「社会的幸福度」4.97pは、「主観的幸福度」6.8pより低い。

その背景には、自由コメント「人口減少が進み、寂しい。」に、象徴されるものがあるかも知れない。

1. 小国町の地区別「幸福度」

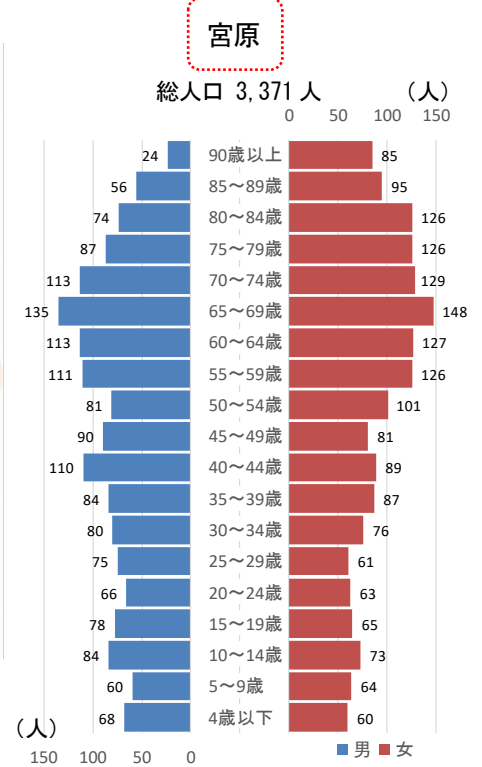
>宮原と西里の幸福度が高い（前頁、図表1）。
 >宮原は、小国町人口の半数近くが住む中心地。
 一方、西里は、人口400人強の、第三者から見れば「限界集落」であり、人口減少のスピードも違う（図表3）。☞次頁以降、西里の高い幸福度の背景を探る。

図表2：小国町資源マップ

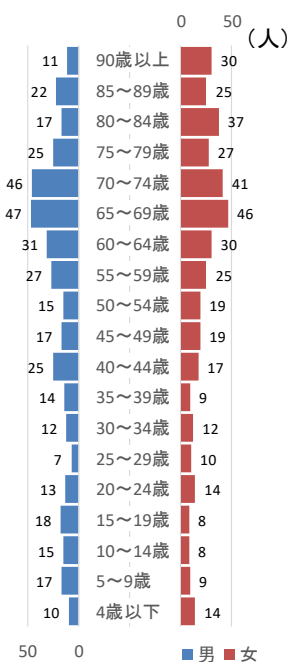


資料：地方創生の動向 SDGs 未来都市「小国町」の取組 より

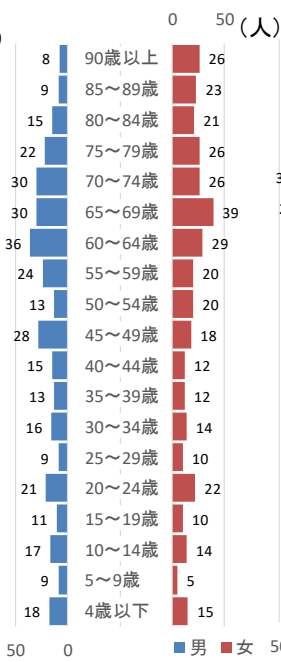
図表3：小国町「6地区」の人口ピラミッド



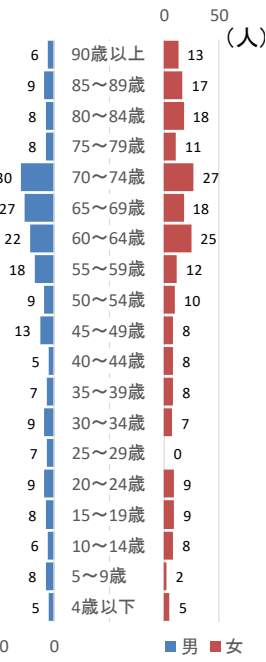
上田
総人口 789人



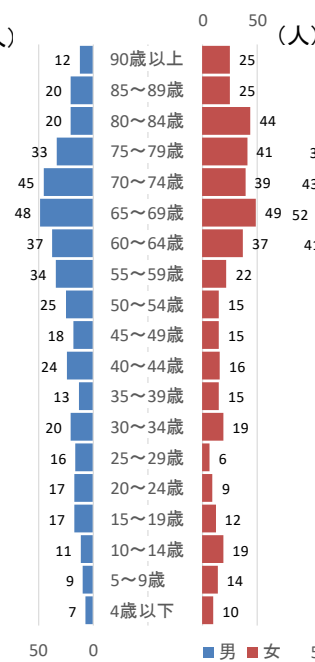
北里
総人口 706人



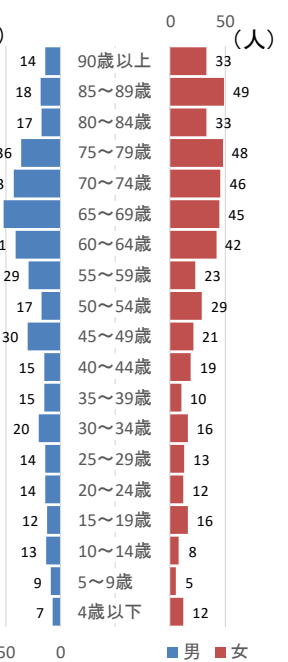
西里
総人口 429人



下城
総人口 858人



黒淵
総人口 896人



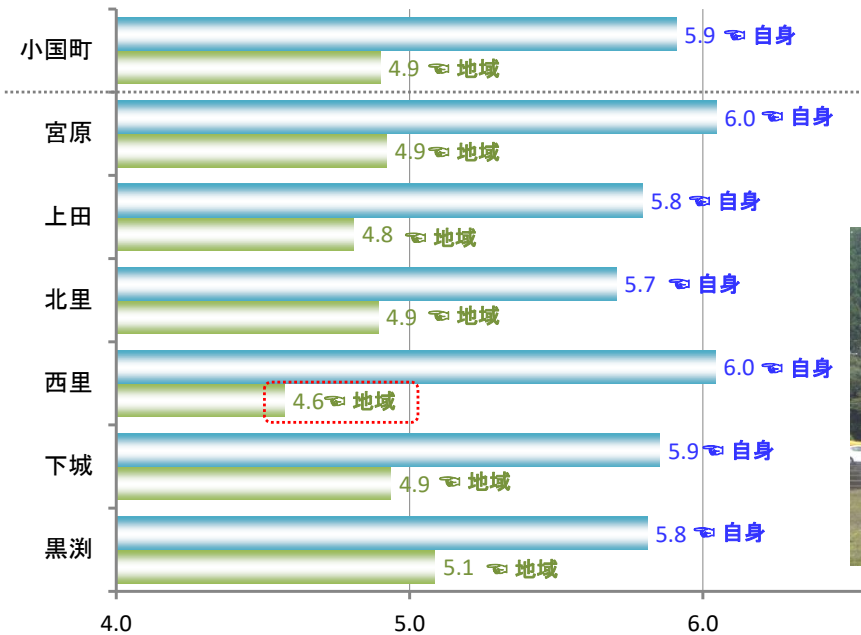
資料：第2期小国町人口ビジョン（小国町住民台帳2019年12月）

2. 西里の「教育環境」と「生活の安全」の評価は低いのに・・・？

- 西里小学校は、2009年に廃校になっている。
- また、がけ崩れなどの自然災害の不安がある集落もある。
- ☞なのに、「幸福度」が高いのは、何故か？

図表4：教育環境

- 自身の教育：あなたは、ご自身がこれまで受けてきた教育や、習得した技能について、満足していますか？
- 地域の教育環境：あなたは、あなたの、そして地域の子供たちの将来が、幸福へと向かう教育環境が整っていると、思いますか？



※小国町の「地域の教育環境」4.9pは、「自身の教育」5.9pより低い。その要因として、小学校の統廃合や中学校までの交通手段、更には、高等教育への進学環境などが課題と認識されているのかも知れない。

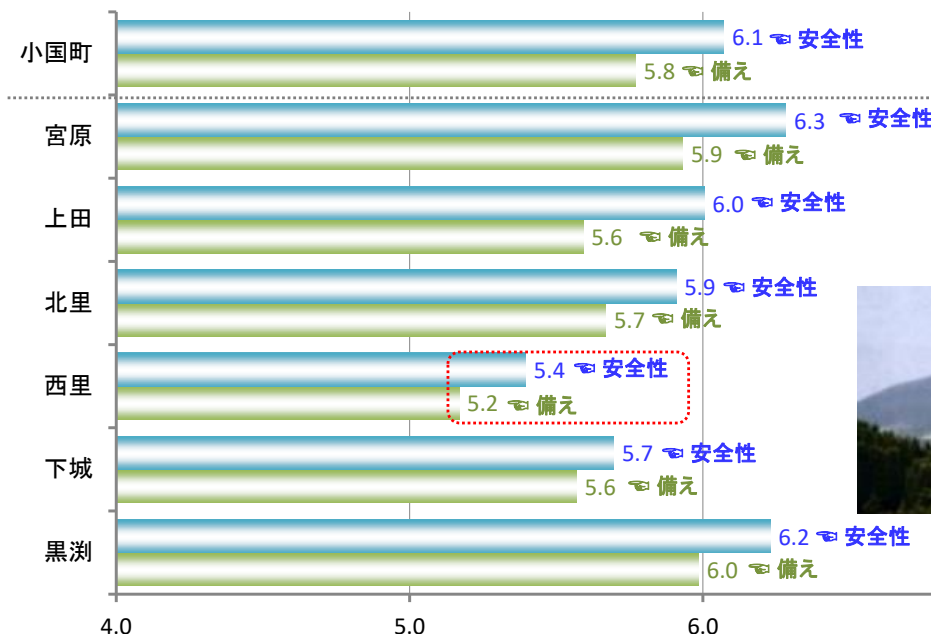


2009年廃校となった西里小学校

図表4～9は「1～10」の10段階評価。点数が高いほど満足度が高い。

図表5：生活の安全

- 生活の安全性：あなたの地域は、災害や犯罪などに関して、安全だと思いますか？
- 生活の安全への備え：また、防災や防犯、救急体制などの備えができていると感じますか？



※生活の安全に関する評価は、他の設問と比較して、地区間の差が大きい。特に、西里と下城が低いことから、自然災害に関する地理的条件が背景にあるのではないかと考えられる



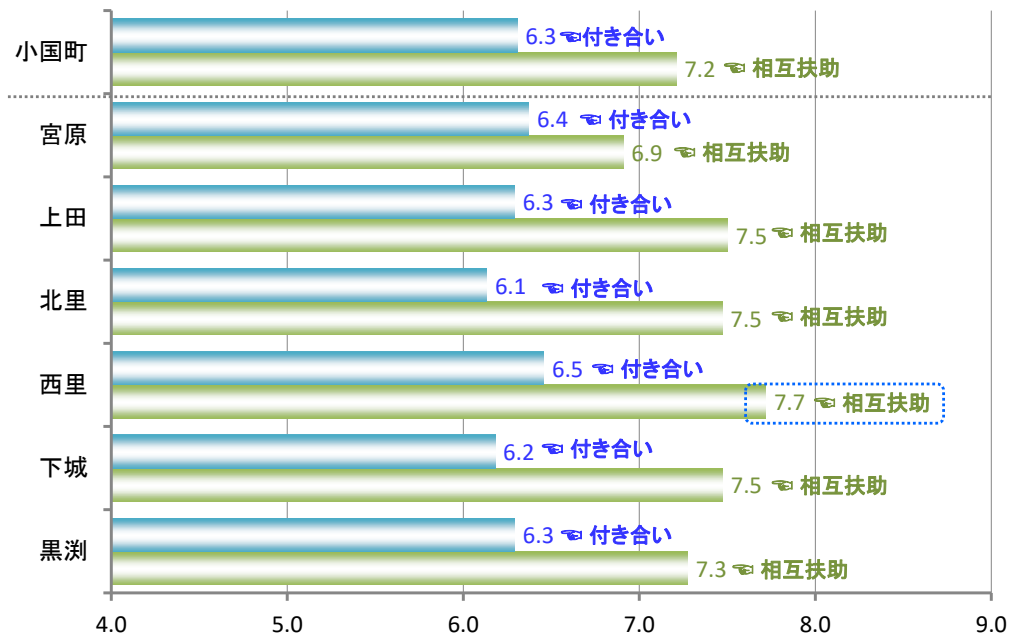
2005年の豪雨による涌蓋山腹崩壊

3. 西里の「相互扶助」「自治」

➤西里は、「近所付き合い」「相互扶助」といった社会とのつながりや、「自治」に関する評価が高い。

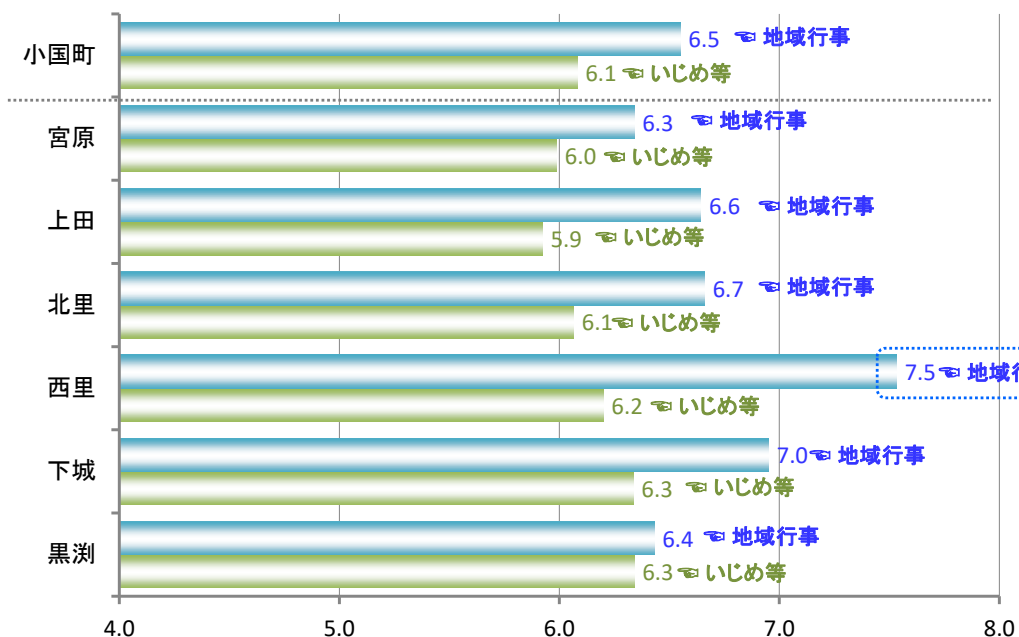
図表 6：社会とのつながり

- 付き合い：あなたは、ご近所づきあいや、自宅以外でくつろげる所（友人やお店など）は、ありますか？
- 相互扶助：あなたのご近所、あるいは地域では、何かあった時お互いに声を掛け合ったり、お手伝いをしたりする習慣はありますか？



図表 7：自治

- 地域行事：あなたは、選挙や集落などの行事への参加について、積極的ですか？
- いじめ等：あなたの地域では、学校での子どものいじめや、家庭内暴力、汚職の問題などに対して、多くの人が強い関心を持っていると感じていますか？



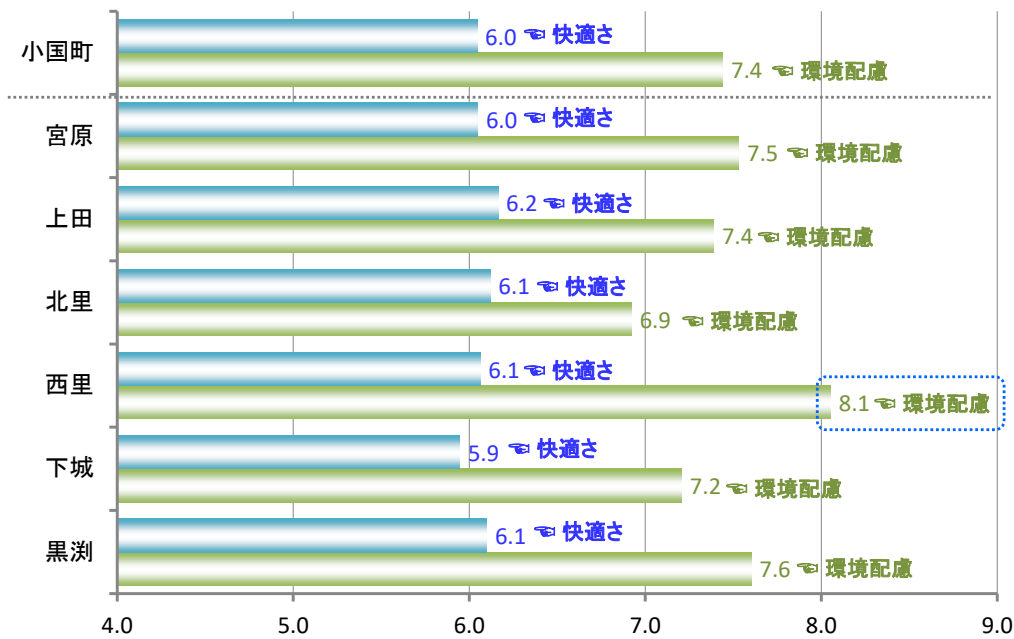
※互恵・相互扶助・自治に関する評価は、他の設問と比較して、6地域全域で高い(6p以上)。
 ※農村社会に共通する特徴として、持続可能性を自生する力の源泉となっている可能性がある。

4. 西里の「住居」「自然や歴史・文化」

> 「住居」と「自然や歴史・文化」に対する評価が、際立って高い。
 > 西里は涌蓋山の麓^{わいたさん}にあって、岳湯地区やはげの湯地区では、自宅から湯けむりが勢いよく上がり、お風呂、上水道、暖房などに、24 時間 365 日、地熱が利用されている。

図表 8 : 住居

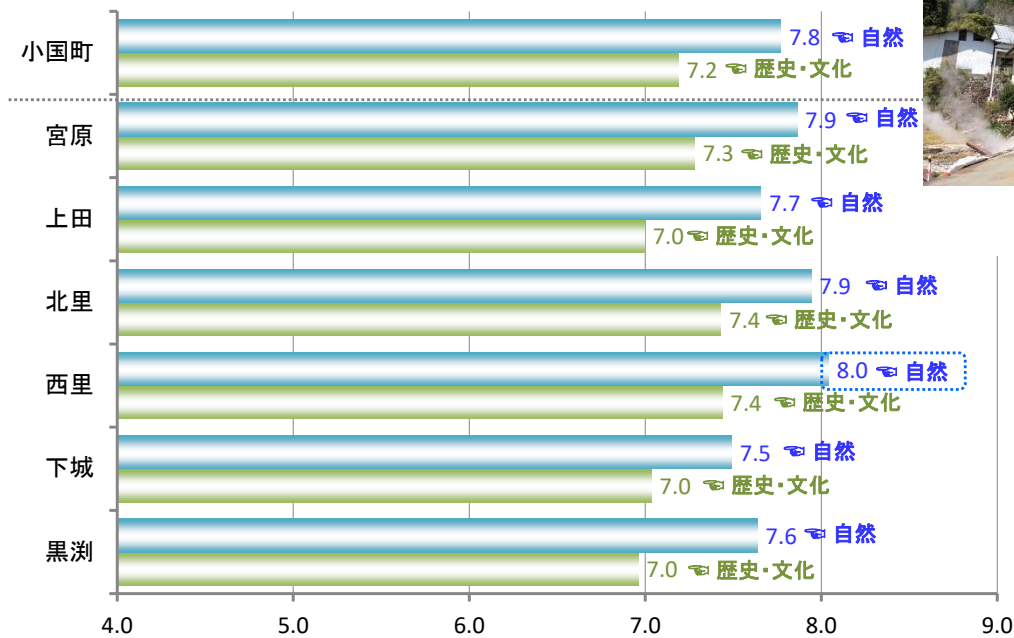
- > 快適さ : あなたは、現在のお住まいに、「快適さ」や「ゆとり」を感じていますか？
- > 環境配慮 : あなたは、お住まいについて、省エネや CO₂削減など、環境にやさしい作りの方が良いと思いますか？



※小国町全域で、自然環境や、地元の自然・歴史・文化への評価が、極めて高い(7p以上)。
 小国町の特徴として、持続可能性を自生する力の源泉となっている可能性がある。

図表 9 : 自然や歴史・文化

- > 自然 : あなたは、地元の自然を素晴らしいと感じていますか？
- > 歴史・文化 : あなたは、地元の歴史や文化に誇りを感じていますか？

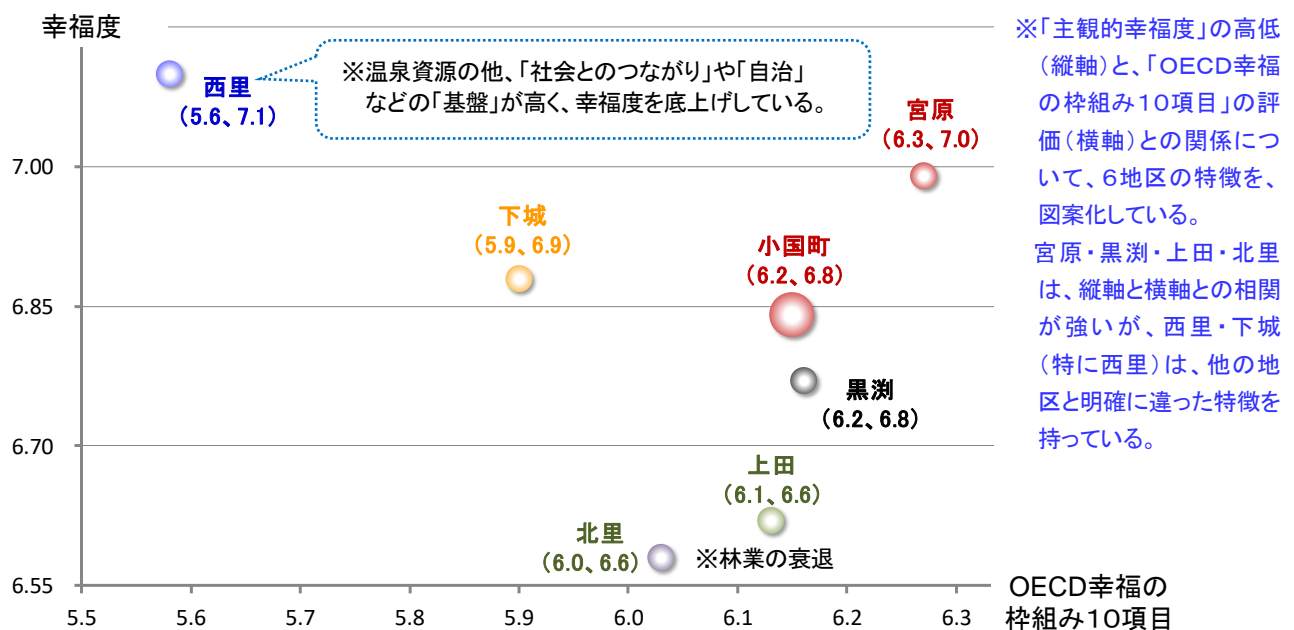


西里の湯けむり集落

5. 「幸福度」と「OECD 幸福の枠組み」

- 「幸福度（Y軸）」と「OECD 幸福の枠組み（X軸）」※との関係を比較すると、西里は、小学校の廃校や、災害の大きさから「OECD 幸福の枠組み」の満足度が小さいが、わいた温泉という温泉資源や、「社会とのつながり」や「自治」などの社会システムにおける「基盤」の高さから、「幸福度」が最も高くなっている。
- 杖立温泉を有する下城も、西里と同様の構造である。
- 宮原の「幸福度」が高いのは、「OECD 幸福の枠組み」の満足度が大きいから。
 - ☞つまり、宮原には温泉といった特別な資源は無いが、小国町の中心地として、商業施設、医療・福祉、公共交通機関（路線バス）、行政等の生活インフラが整っている。

図表 10 : 「幸福度」と「OECD 幸福の枠組み」



※「OECD 幸福の枠組み」とは

- OECD（経済協力開発機構）が、2011年から提唱している10項目。
 - 1.所得と資産 2.仕事と報酬 3.住居 4.教育 5.健康 6.ワークライフバランス 7.社会とのつながり
 - 8.ガバナンス 9.生活の安全 10.環境・歴史・文化

<最後に>

- 人口400人ちょっとの西里地区は、2009年に小学校が廃校になるなど、第三者から見れば、典型的な**‘限界集落’**。
- なのに、その住民の**‘幸福度’**が最も高いという事実を、経済合理性のイデオロギーでは説明が出来ない。
- ‘限界集落’のイメージから来る先入観を退け、**ニュートラルな事実認識**に努めると、幸福感の背景に、わいた温泉をはじめとした自然の恵みと共に、相互扶助、互惠、自治といった社会システムが見えてくる。
- 町、村、集落などの**社会組織としての持続可能性の問題**と、**‘住民の暮らし’**が**自生する力**とは、別物だということだろう。
- 次章では、この‘住民の暮らし’が自生する力が、どこから来るのか、更に掘り下げる。そこに、全く**新しい市場**が見えて来る。

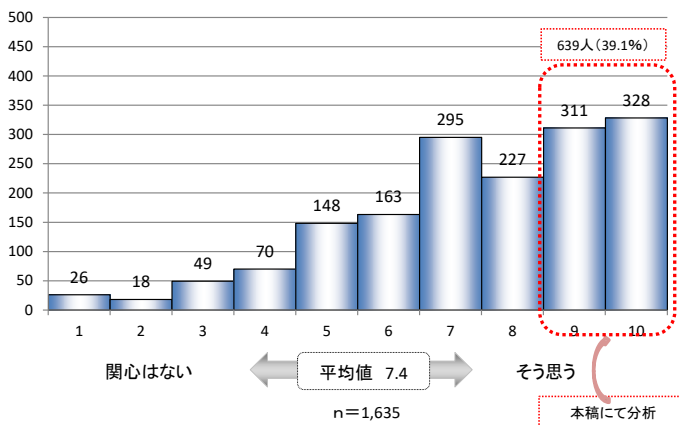
第3章

➤第3章では、前章までで探った、その背景を、住民アンケートから整理し、潜在する新しい世界を開示する。
 経済合理性の追求では、この事実は見えてこない。‘過疎地域’‘限界集落’が、人口減少社会の未来の扉を開く世界である。
 そこに、新たなビジネスの可能性(コロンブスの卵)を、見出した。

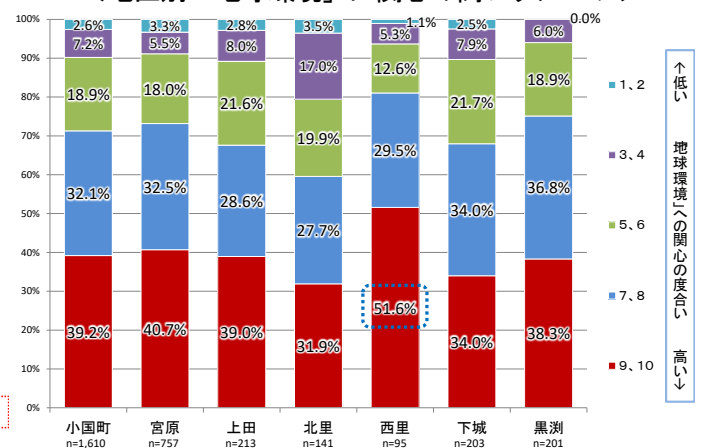
図表1：「住まい」の省エネやCO₂削減に配慮した作り

Q：あなたは、住まいについて、省エネやCO₂削減など、環境にやさしい作りの方がいいと思いますか？

<小国町全体>



<地区別「地球環境」に関心の高いグループ>

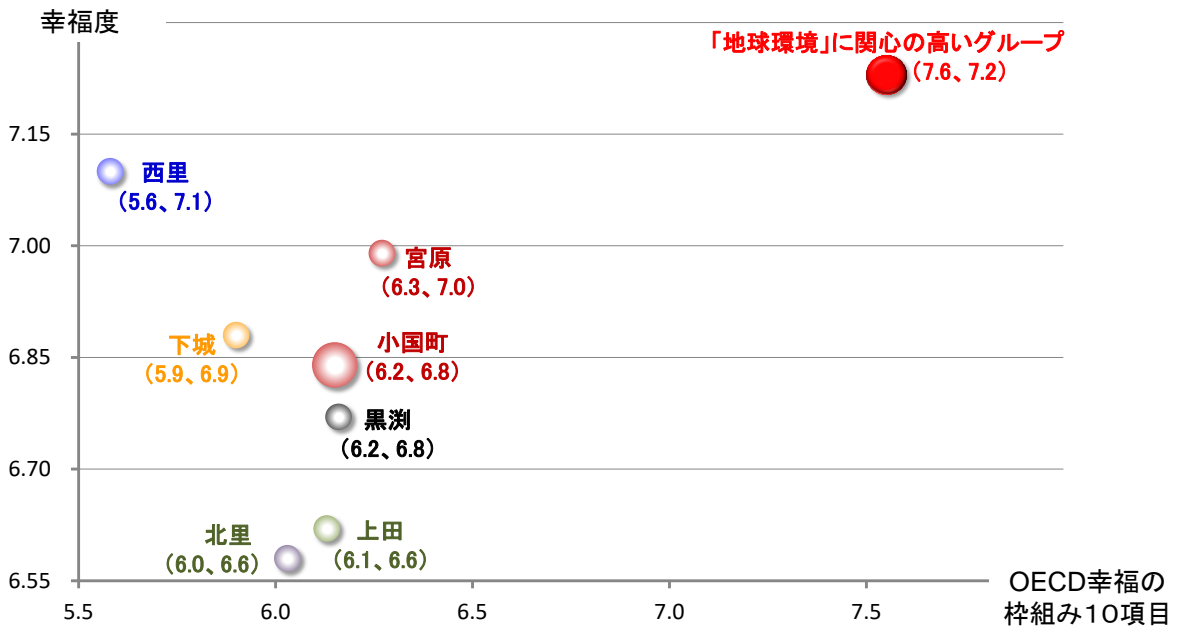


「関心はない：1点」～「そう思う：10点」の、10段階評価。

1. 「地球環境」に関心の高いグループの幸福度

>小国町には、環境配慮型の「住まい」に、極めて高い関心を示すグループが、4割弱存在し、特に「西里」は5割を超えている（前頁図表1）。
 >この、「地球環境」に関心の高い人々は、幸福度が際立って高い（図表2）。
 >このグループの性別や年齢別といった属性は、小国町全体の構成とほぼ同じであり、これといった特徴は見られない。

図表2：「主観的幸福度」と「OECD 幸福の枠組み」

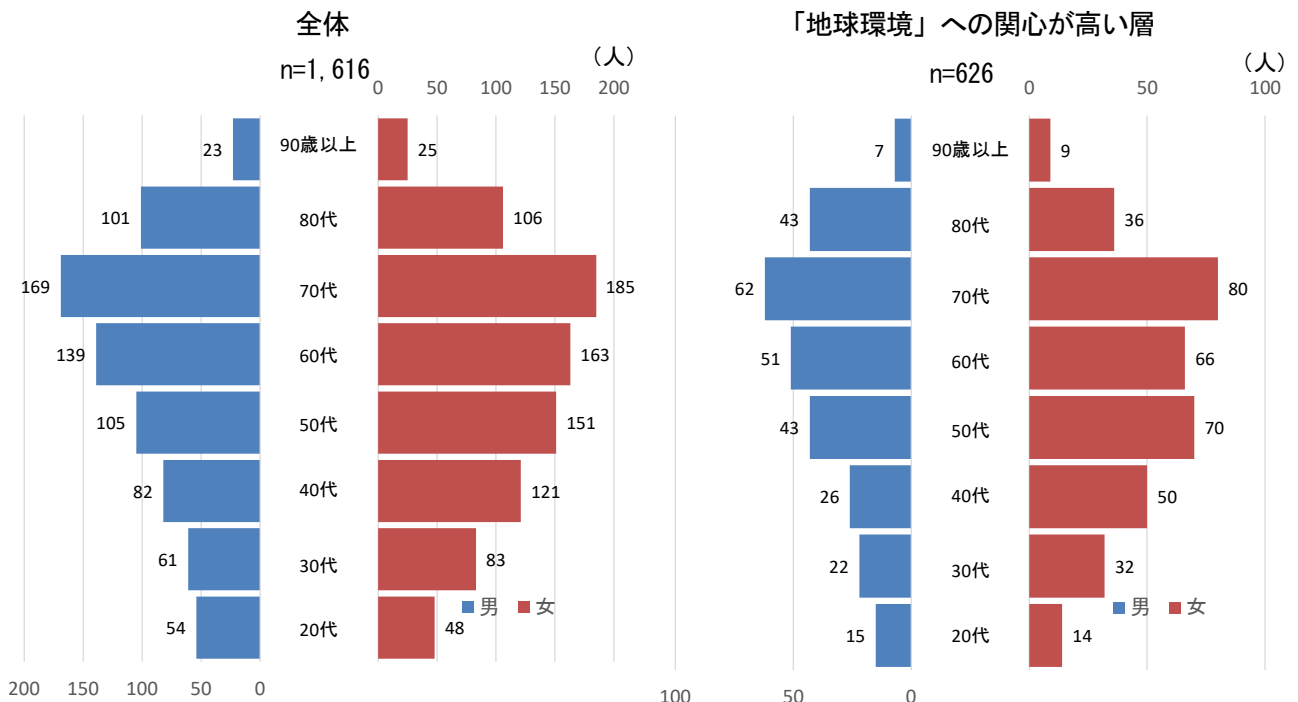


※「OECD 幸福の枠組み」とは

>OECD（経済協力開発機構）が、2011年から提唱している10項目。

- 1.所得と資産
- 2.仕事と報酬
- 3.住居
- 4.教育
- 5.健康
- 6.ワークライフバランス
- 7.社会とのつながり
- 8.ガバナンス
- 9.生活の安全
- 10.環境・歴史・文化

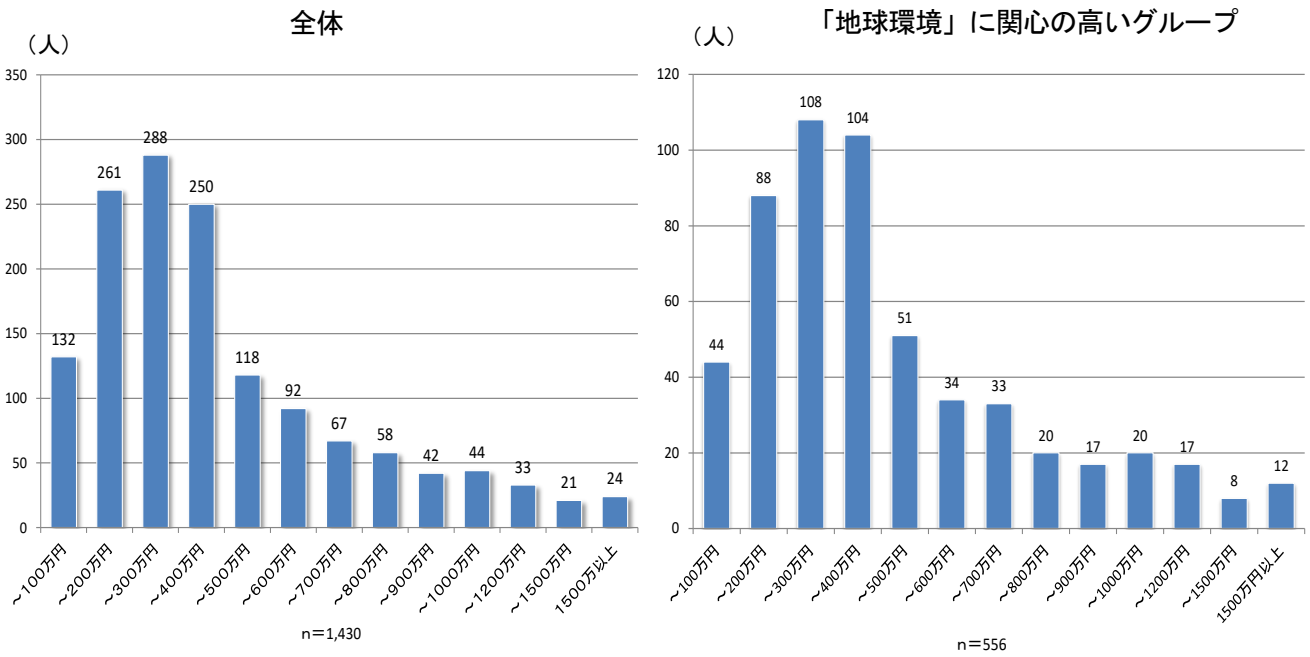
図表3：性別・年代別回答者内訳



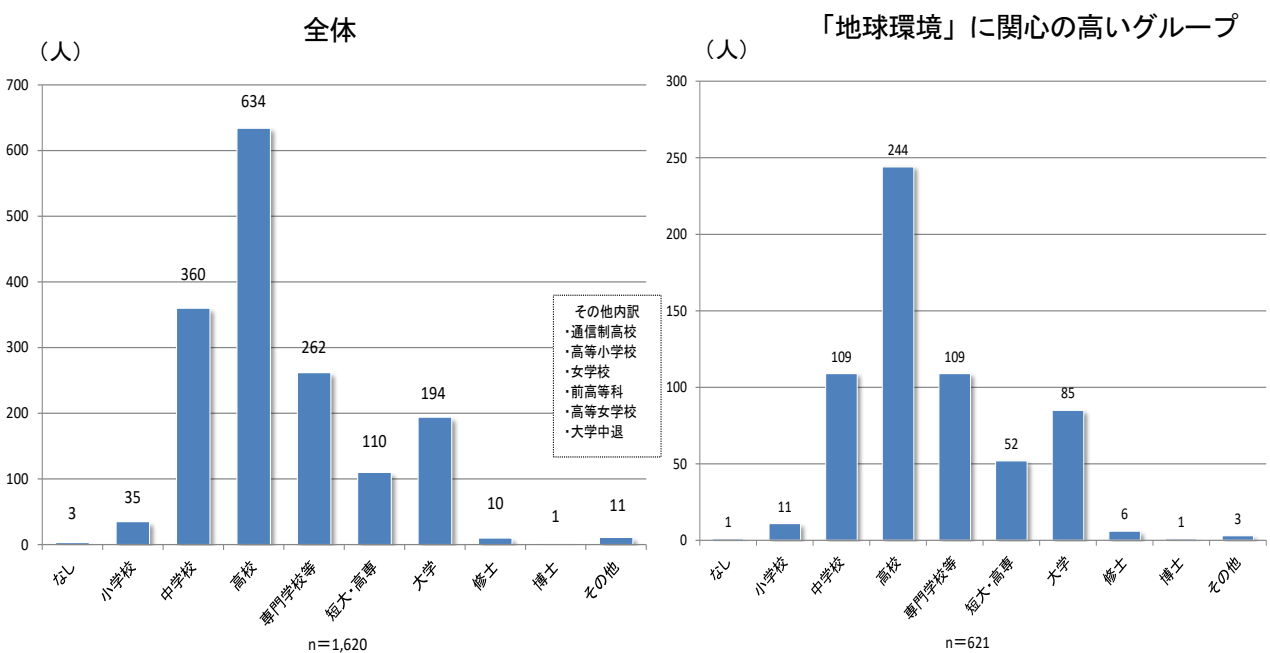
2. 「地球環境」に関心の高いグループの特徴は・・・？

➤年収や学歴面を比較しても、「地球環境」に関心の高いグループには、これといった特徴は見い出せない。

図表 4：世帯年収



図表 5：最終学歴

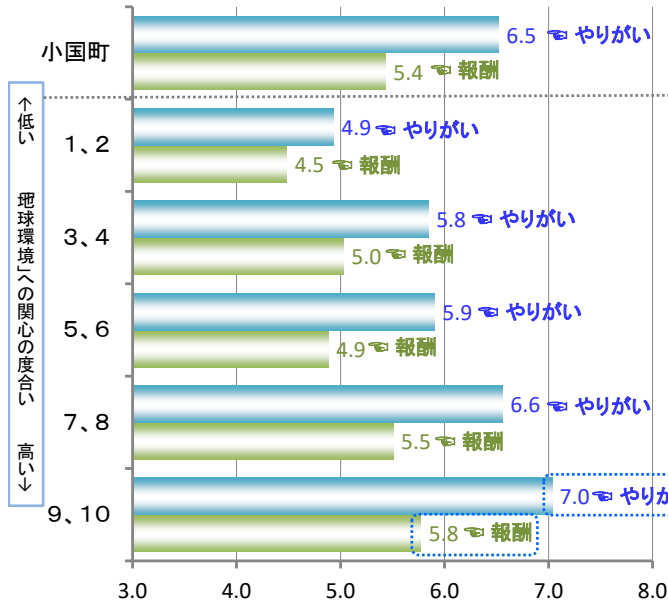


3. 「OECD 幸福の枠組み」の特徴的な評価

➤ 「地球環境」に関心の高いグループの属性には大きな特徴は見い出せないが、「OECD 幸福の枠組み」に対する評価は、際立って高い。

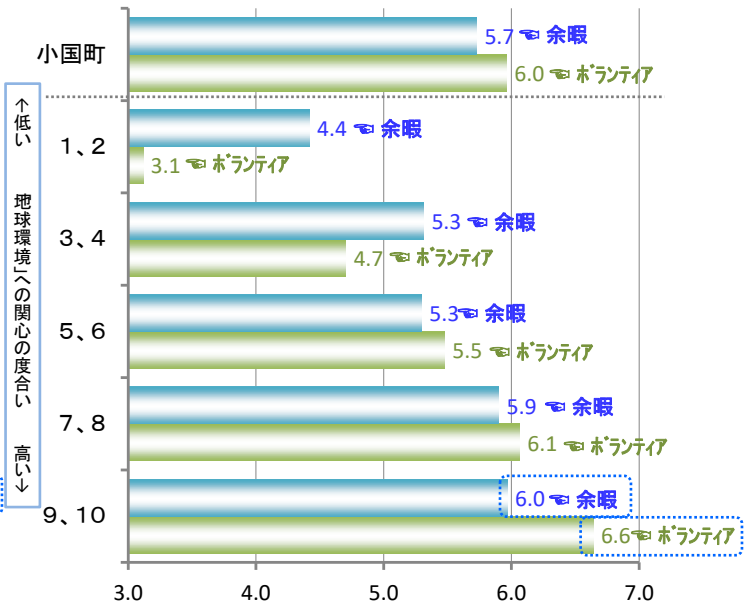
図表 6：仕事と報酬

Q：あなたは、現在のお仕事に「やりがい」を感じていますか？
 Q：あなたの現在の報酬は、あなたの「がんばり」に見合うものだと感じていますか？



図表 7：仕事と余暇

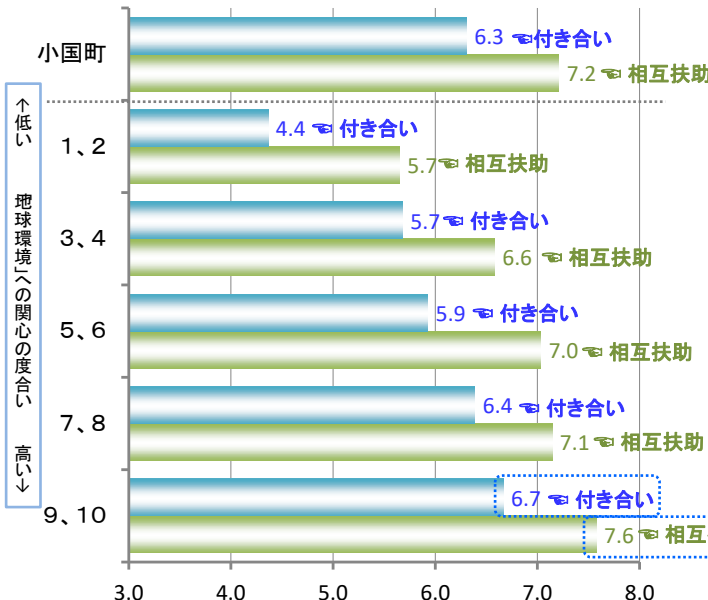
Q：あなたは、ご自身やご家族、あるいは地域のために過ごす時間を、十分に持つことができていると感じていますか？
 Q：あなたはボランティア活動に関心がありますか？



図表 6～9 は「1～10」の 10 段階評価。点数が高いほど満足度が高い。

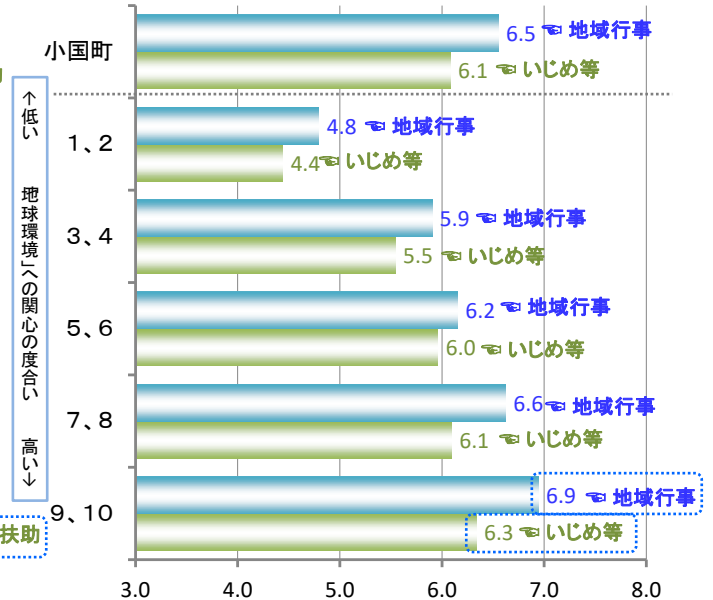
図表 8：社会とのつながり

Q：あなたは、ご近所づきあいや、自宅以外でくつろげる所は、ありますか？
 Q：あなたのご近所、あるいは地域では、何かあった時にお互いに声を掛け合ったり、お手伝いをしたりする習慣はありますか？



図表 9：自治

Q：あなたは、選挙や集落などの行事への参加について、積極的ですか？
 Q：あなたの地域では、学校での子どものいじめや、家庭内暴力、汚職の問題などに対して、多くの人が強い関心を持っていると感じますか？

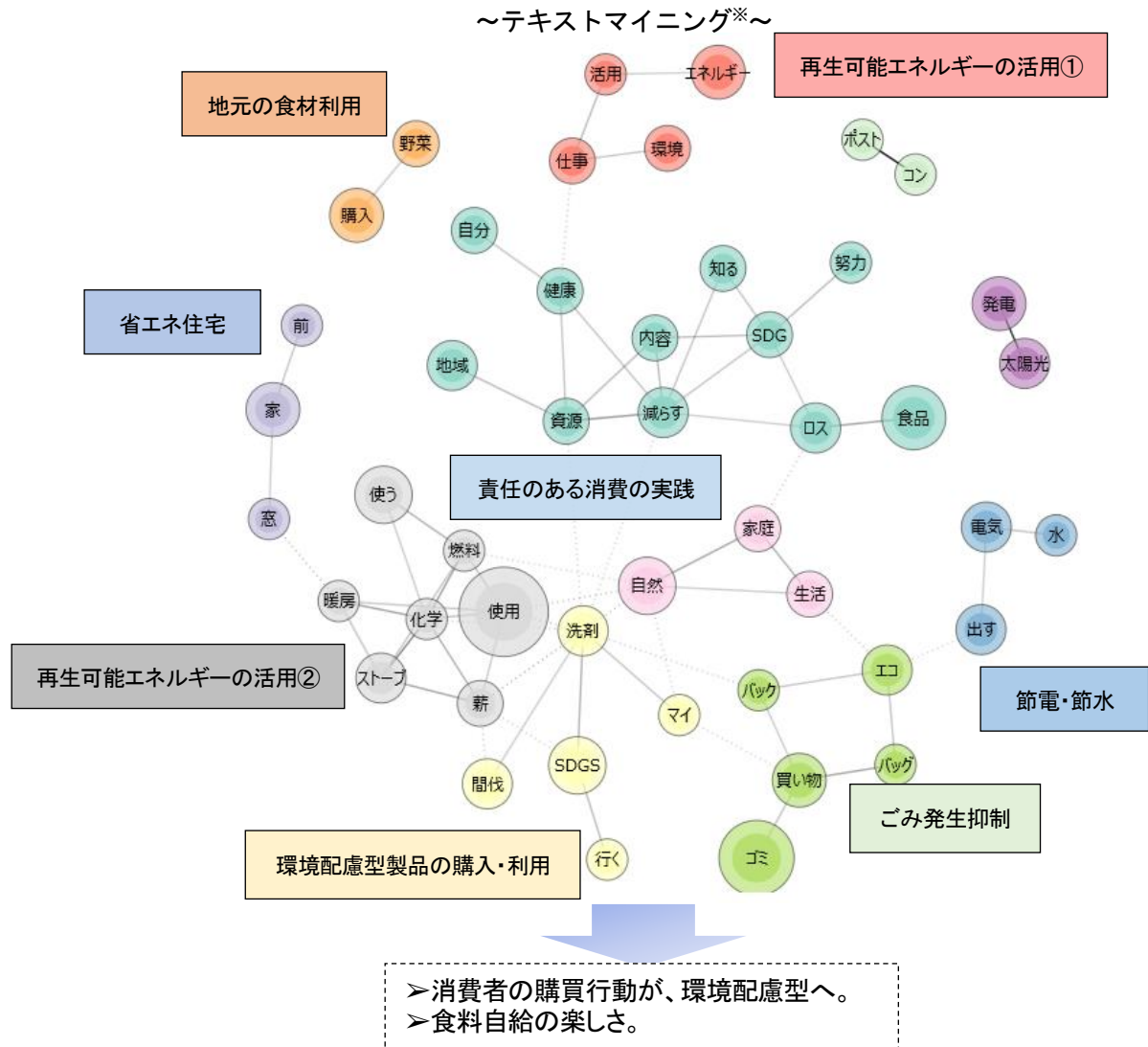


4. 自由コメントからみえてくるもの

➢「地球環境」に関心の高いグループの自由コメントから、以下の価値観が浮かび上がってくる。

- ①再生可能エネルギー、省エネ、節電・節水
- ②責任ある消費、環境配慮型商品の選別、地元の食材利用
- ③消費後の廃棄物抑制

図表 10 : 「地球環境」に関心の高いグループの自由コメント



<特徴的なコメント>

性別	年齢	①再生可能エネルギー、省エネ、節電・節水
男性	60代	家の建て替え、耐震性の強化。太陽光発電の活用。オール電化で防災面を考慮。
性別	年齢	②責任ある消費、環境配慮が他商品の選別、地元の食材利用
女性	40代	ゴミを減らす、アイドリングストップなど CO ₂ 削減のため努力している。 小国産や県産品を買うようにしている。募金を行うようにしている（ユニセフ他）。 世界の状況を知るように意識している。町が SDGs 未来都市であることを誇らしく思っている。
性別	年齢	③消費後の廃棄物抑制
女性	70代	食物の残り等はコンポストで発酵させ堆肥として利用している。

※テキストマイニング

文章から、言葉の出現頻度や相関関係、傾向などを見える化する分析方法。本稿では「KH Coder」を使用する。

5. 総括

- 国内はもとより世界の経済社会が、感染症終息後には大きな変化に向かう可能性が出てきている。
過密都市より地方社会の安定・安全性等の見直しの気運であり、経済合理性を追求するゼロサム社会からの脱却である。
- そのネクストソサエティの先導者となるのが、今回、存在が明らかになった「地球環境」に関心の高いグループではないかと考えている。

(1) 新たな市場の開発

「地球環境」に関心の高い人々は、消費生活にも明確な意思を持っている（前頁図表 10）。彼らの問題意識は、解決すべき社会課題であり、それを顕在化させると、ビジネスの対象となる‘ニーズ’になる。

この社会課題を起点に、SDGs（持続可能な開発目標）と自社の事業領域との関係を検証していくと、新たな市場が見えてくる。

☞ご関心のある方は、当研究所にご連絡ください。「SDGs経営支援メニュー」を準備しています。

(2) 共生社会の形成

彼らは、再生可能エネルギーに強い関心を持ち、地域資源の価値を知り、相互扶助と互惠、そして自治を大事にしている。

本格化する人口減少社会において、彼らをステークホルダーにすることで、地域循環型の持続可能な共生社会を形成する扉が開くと考える。

(3) 証拠に基づく政策立案（EBPM : Evidence-based policy making）

経済合理性の追求だけでは社会課題を解決できない様な、大きな変動期を迎えていることに、多くの人が気づき始めている。これまでの経験や勘が通用しない、パラダイム・シフトの問題だ。

3 回シリーズでご紹介してきた「幸福度指標」は、17 個の SDGs との関係性をマトリックス表（右図）に整理することで、自治体が策定している地方版総合戦略の KPI と紐付けることができる。

行政の KPI を、住民が評価するツールとなる。

図表 11 : 「EBPM」マトリックス表イメージ

	OECD	住民アンケート	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
幸福の枠組み																			
1. 所得と資産	5.6	5.6																	
2. 仕事と報酬	6.4	6.4																	
3. 住居	7.0	7.0																	
4. 教育	4.8	4.8																	
5. 健康	8.2	8.2																	
6. WLB	8.1	8.1																	
7. コミュニティ	7.8	7.8																	
8. ガバナンス	6.6	6.6																	
9. 環境・文化	9.4	9.4																	
10. 生活の安全	8.8	8.8																	
社会的幸福度	7.4	7.4																	
主観的幸福度	8.6	8.6																	

EBPM <EBPM>
Evidence Based Policy Making
(証拠に基づく政策立案)

以上